関西大学『社会学部紀要』第47巻第1号，2015，pp.53-83　ISSN 0287-6817

研究ノート

近現代文芸の中の広告（2）
── 明治期以降の文学作品中の言説渉猟 ──

水　野　由多加

Advertising in modern literature（2）;
Examples of Japanese advertising in modern literature

Yutaka MIZUNO

Abstract

The Japanese word "Koukoku," which means the translation and coinage of advertising, was used after the Meiji Era instead of "Hirome," which just means spread out. The author conducted an extensive literature review to document examples of Koukoku in the literature following the Meiji Era, and describes them in this paper. This effort may prepare the way for a deeper investigation in the form of media studies into the definition and meaning of advertising in Japanese society and culture.

Key words: literary text, literature, advertising, advertisement, discourse, sociolinguistics

抄　録

広告という言葉はAdvertisingの翻訳造語として、それまでの広目に代わって明治期以降日本社会で使用される。筆者は、今回、明治期以降の文芸の中にその用例を狩猟、観察する。この作業は今後のより深い広告に関する社会的文化的な定義と意味についてのメディア論的な検討を準備することとなる。

キーワード：文芸、広告、言説、社会言語研究

はじめに

前稿（拙稿「近現代文芸の中の広告（1）── 明治期以降の文学作品中の言説渉猟 ──」『関西大学社会学部紀要』第46巻第１号）に引き続き、明治期以降の文芸作品をテキストとして用いる社会学的広告研究として、「社会の中の言説」に広告現象がいかに扱われ、意味づけられたかを見る、そのための素材収集と記録を行う。

１．徳富蘇峰「将来之日本」（1885、M18）に見る「アメリカの広告」

しからばすなわち英国がいわゆる伯を世界に振うゆえんのものは、しかしてかの世界の最強国たる露国をしてあえてその右に出ずることあたわざらしむるゆえんのものはロンバード街の貨幣市場あるがゆえなり。ニューカッスルの造船所あるがゆえなり。マンチェスターの綿花製造所、シェフィルドの鉄器製造所あり、ロンドンの万檣（ばんしょう）林立の港湾あるがゆえなり。実にかの諸製造所の烟筒より吐き出（い）だす万丈の黒烟は敵を報ずる烽火台（ほうかだい）のごとく、かの露国をしてあえてその野心を逞しゅうすることあたわざらしめたり。看よ看よいかにかの露国がその人民を鞭撻（べんたつ）し、その膏血（こうけつ）を絞るも、限りあるの財本はもって限りなきの経費に充（あ）つるあたわず。策究し術尽き、その最後の手段はただその不信用を世界に広告する高利の公債をばロンバード街に向かって募集せざるべからざるの勢いに迫らずんばあらず。

２．大杉栄「獄中消息」（1908、M41）に見る「組織」

堀保子宛・明治四十二年二月一日

手紙見た。ちょうど四カ月目に懐かしい筆跡に接したので非常に嬉しかった。今日は雑誌の発刊についてというので臨時発信の許可を得た。よってこの返信を書く。

『家庭雑誌』の再興も面白かろう。僕も賛成する。そこで大体の方針に関する僕の意見を述べて見よう。

まず第一に改題するがいい。いつかも議論のあったように『新婦人』などはどうかと思う。そしてその内容も、兄などの言うがごとくに、ただ没主義な卑俗なものにしてしまうよりは、やはりその名の実をとって新婦人主義（フェミニズム）を標榜して貰いたい。もっともこれも程度の問題だろうが、最初の『家庭雑誌』くらいのところかあるいはもう少

し進んだくらいのところなら、別に差支えもなかろうじゃないか。そして従来の多少の革命的の部分を科学的に代えるのだね。まず売捌きの点から考えてもこの方が都合よかろう。今さらとても他のいわゆる婦人雑誌と競争のできるものでもなし、読者はやはり昔からのお馴染のほかに、主として同志の中に求めねばなるまい。

同志と言っても口でこそ大きなことも言え、その実際生活においてはみなこの『新婦人』以下のところに蠢いているのだ。それに今は、仲間の雑誌が何もないことと思う。したがって同志はよほど読物に餓えているに違いない。またこんな際に雑誌を出すものの義務は、多少なりとも同志間の連絡あるいは広告の機関に供するにあると思う。何だか事がむずかしくなるようだけれど、ちょっとした個人消息を載せるだけでもどれほどその助けになるか知れない。

編集人は兄の方で適当の人があるかも知れんが、こんな意味からもやはり守田に頼むのがよかろう。ちょうど婦人運動をやりたがってもいるのだし、自分のもののようにして骨折ってくれるに違いない。そして幽月などの新婦人連に大いに助力して貰うのだね。また、秋水にもこんどは是非毎号筆を執って貰いたい。科学の話などはお得意のものだろう。

なお、いろいろ言いたいこともあるが、社会の事情もよくわからんし、また他に相談相手もあることだから、こんなところで止めて置こう。そしてこの上の細かい点については会って打合せすることにしよう。この手紙の着次第、さっそく来て貰いたい。

若宮に本を借りることのできないのは非常に失望した。こんどは山田に相談して見てくれないか。少し専門が違うようだから「順序と組織を立てて」というようには行くまいが、多少あんな類のものを持っていよう。また、他の種類のものでもいい。ともかく、毎月何か二、三冊借りるように頼んで見てくれ。英文、地球の生滅二冊、および植物の精神一冊を堺家から借りて来てくれ。同事にエス文学を忘れないように。先月以来差入れのものはようやく四、五日前に手にはいった。こちらの郵送のものは着いたろうね。

諸君によろしく。さよなら。

3．志賀直哉「ある一頁」（1911、M42）に見る「広告」電燈

新し橋の小さな西洋料理屋を出ると直ぐ、彼は妹や弟を還して独り新橋の停車場へ向かった。褪たような白っぽい夕方の空気の中を人々が忙しそうに行き来する。彼の歩行も自ずと早くなった。停車場では六時半の一二等の急行が出る間際であった。改札口へ集まった人々の間をくぐり脱けて彼は築地へ面した表口へ出た。其処で正木に会った。二人は石

段の上に立って話した。急ぎ足で来る森下の麦藁帽子が眼に入る。間もなく武田も来た。彼の乗る三等急行にはまだ小一時間もあった。四人は広告の電燈が強い光をなげている広場を新橋の方へ歩き出した。

４．伊波普猷「ユタの歴史的研究」（1913、T2）に見る「高札をいう広告」

前々より時之大屋子とて文字の一字も不存者を百姓中より立置、日の吉凶を撰、万事用候得共、此前より唐日本の暦用可申由申達相済候事。

とあるのを見ても明白であります。これじつに今から二百四十七年前のことである。前にも申上げた通り、時之大屋子（ときのおおやこ）という覡は民間において勢力を有していたばかりでなく政府の御用をも務めたのであるから、当時の社会においてはかなり枢要な位地を占めていて劇文学の材料にまでなったくらいであります。余計な事とは思いますが、昔□時之大屋子のことを想像する便りにもと思って「孝行の巻」という組踊（くみおどり）を紹介することに致しましょう。御参考にもなることと思いますから原文のままを御覧に入れようと思います。最初に頭が出て来て、

出様来（でやうきや）る者（もの）や、伊祖（いぞ）の大主（おほぬし）の御万人（おまんちよ）の中（うち）に頭取（かしらどり）聞（き）ちゆる者どやゆる、お万人のまぢり誠（だ）によ聞留（ききと）めれ、ムルチてる池に大蛇（おほぢや）住（す）で居（を）とて、風（かぜ）の根（ね）も絶（て）らぬ、雨（あめ）の根（ね）も絶（て）らぬ、屋蔵（やぐら）吹（ふき）くづち、原（はる）の物作（もづくり）も、根葉（ねは）からち置（お）けば、昨年（こぞ）今年（ことし）なてや、首里（しゆり）納（を）さめならぬ、那覇（なは）納（を）さめならぬ、御百姓（おひやくしやう）のまじりかつ死（じに）に及（およ）で、御願（おねげ）てる御願（おねげ）、祈（たか）べてるたかべ、肝揃（きもそろ）て立（た）てゝ、肝揃（きもそろ）て願（ねげ）は、時のうらかたも神のみすゞりも、十四五なるわらべ、蛇（ぢや）の餌（えぢき）餝（かざ）て、おたかべのあらば、お祭りのあらば、うにきやらや誇（ほこ）て、又からや誇（ほこ）て、作る物（も）作（づく）りも時々に出来（でき）て、御祝事（おいわひごと）ばかり、百果報（もゝがほう）のあんで、みすゞりのあもの、心ある者や、御主（おしゆ）加那志（がなし）御為（おだめ）、御万人（おまんちよ）の為（た

め）に、命（いのち）うしやげらば、産（な）し親（おや）やだによ、引（ひ）きはらうぢ迄（まで）もおのそだて召（めしや）いる、仰（おほ）せ事拝（ごとをが）で、高札（たかふだ）に記しるち、道側（みちばた）に立てゝ、道々（みち）〳〵に置（おき）ゆん、心ある者や、心づくものや、肝揃（きもそろ）て拝め、肝留（きもとめ）て拝め、高札よ〳〵立てやうれ〳〵

といって広告を出す。そうするとある孝女がそれを見て、家内の困難を救うために老母のとめるのも聞かないで自ら進んで今度の犠牲になろうと申出る。そこでムルチのほとりに祭壇を設けていよいよ人身御供をやるという段になる。

5．上司小剣「鱧の皮」（1914、T3）に見る「色の変わる広告電燈」

河岸（かし）に沿うた裏家根に点（つ）けてある、「さぬきや」の文字の現れた広告電燈の色の変る度に、お文の背中は、赤や、青や、紫や、硝子障子（ガラスしようじ）に映るさま〴〵の光に彩（いろど）られた。

6．谷崎潤一郎「鬼の面」（1916、T5）に見る「歌舞伎座の新聞広告」

「そうだ、一つ歌舞伎座へ行って見よう。」

今朝新聞の広告を読んだ時に、彼は大阪の雁次郎と云う役者が此間から歌舞伎座へ来て「引窓」と「河庄」をやって居るのを覚えて置いた。彼は「河庄」の名を聞くと共に「天網島」を想い出し、「天網島」から偉大なる巣林子の戯曲家としての天分を想い出し、それ等の物を「徳川時代の軟文学研究」と云う方面に勝手に結び付けて、是非とも其れを見なければ、自分の役目が済まないように考えたりした。

7．近松秋江「うつり香（原題「情火」）」（1916、T5）に見る「売り出しの楽隊」

これから二人はややしばらく気の置けない雑談に時を過しながら点燈（ひともし）ごろから蠣殻町に出かけていった。

柳沢は歳暮（くれ）にしこたま入った銭（かね）の中から、先だって水道町の丸屋を呼んで新調さした越後結城（えちごゆうき）か何かのそれも羽織と着物と対の、黒地に茶の

千筋の厭味っ気のない、りゅうとした着物を着て、大黒さまの頭巾（ずきん）のような三円五十銭もする鳥打帽を冠（かぶ）っている。私はあの銘仙の焦茶色になった野暮の絣を着て出たままだ。

小石川は水道町の場末から九段坂下、須田町（すだちょう）を通って両国橋の方へつづく電車通りにかけて年の暮れに押し迫った人の往来（ゆきき）忙しく、売出しの広告の楽隊が人の出盛る辻々（つじつじ）や勧工場の二階などで騒々しい音を立てていた。私はそんな人の心をもどかしがらすような街（まち）のどよみに耳を塞がれながら、がっかりしたような気持ちになって、柳沢が電車の回数券に二人分鋏（はさみ）を入れさせているのを見て、何もかも人まかせにして窓枠（まどわく）に頭を凭（もた）していた。

「今日いるか知らん？」

電車を降りると柳沢は先に立って歩きながら小頸（こくび）を傾けて、

「どこへゆこう？」

「さあ、どこでもいいが、その、君の先だって行ったところがよかないか」

私は、これから後々自分が忍んでゆくところにしようと思っている清月に柳沢と一緒にゆくのは厭であった。

「じゃやっぱり彼家（あすこ）にしよう。……僕もあんまり行かない待合（うち）だがお宮を初めて呼んだ待合だから」

そういってお宮のいる置屋（うち）からつい近所の待合（まちあい）に入った。

「……宮ちゃんすぐまいります」女中は報（し）らせて来た。

８．長谷川時雨「竹本綾之助（美人傳）」（1918、T7）に見る「贔屓が広告をする鉄道馬車」

そんな事がかえって玉之助の名を高く揚げさせた。玉之助は子供心にも師に附かなければならないと考え、故人綾瀬太夫のもとへ弟子入りをした。何という名を与えようかと師匠が考えているうちに、お園は自分で綾之助と名附けたと言出した。このまけぬ気の腕白者は、出京早々から肩を入れてくれた久松町の医者某が、大連（たいれん）を催してくれた夜に、語りものの「鎌倉三代記」を絶句して高座に泣伏してしまった。全く彼女の記憶力は強かったので、彼女は無本（むぼん）で語り通していたのであった。

十二歳の春には、もはや真打（しんうち）となるだけの力と人気とを綾之助は集めてしまった。綾之助のかかる席の、近所の同業者は、八丁饑饉（ききん）といってあきらめた

ほどであった。新川（しんかわ）のある酒問屋の主人は贔屓（ひいき）のあまり、鉄道馬車へ広告することを案じだした。それも多くの人目をあつめたに違いなかったが、初（はつ）真打綾之助に贈られた高座の後幕（うしろまく）は、とうてい張りきれぬほどの数であったので、幾枚も幾枚も振りおとして掛けかえた。役者の似顔絵で知られていた絵双紙（えぞうし）やの、人形町の具足屋（ぐそくや）では、「名物人気揃」と題して、人情咄（にんじょうばなし）の名人三遊亭円朝（えんちょう）や、大阪初登り越路太夫（こしじだゆう）（後の摂津大掾（せっつのだいじょう））とならべて綾之助の似顔を摺（す）りだした。

――綾ちゃんは今年十二だが大人（おとな）も跣足（はだし）の巧者で真に麒麟児だね――

との小書（こがき）がつけてあった。

9．喜田貞吉「エタに対する圧迫の沿革」（1919、T8）に見る「労働者が一夜を過ごして渡って行く」「路側の広告塔の中」

さればもとエタの賤しいという程度は、今日の下級労働者が賤しいという位の程度のものであったと思われる。勿論その労働者という中にも、自ら一家をなしているのもあれば、木賃宿や無料宿泊所等を泊り歩いているのもあり、公園のベンチや社寺の椽の下、停車場の待合、路側の広告塔の中などで、一夜を過ごして渡って行く者もある様に、後に斉しくエタと言われた中にも自然その間に上下の差はあったであろうが、しかもこれを以て穢いものだの、特別に変ったものだのとして、疎外せられた筈はない。さればこそエタは宮廷社寺の掃除にも用いられ、飲料水を汲む井戸掘りにも役せられ、神輿を担ぎ鳥居を建てるという様な神事にも、憚らず使われていたのであった。

10. 和辻哲郎「霊的本能主義」（1920、T9）に見る「真価以上に広告」

霊の権威を知り、多少内的生命を有する人にしてなお虚栄に沈湎して哀れむべき境地に身を置く人がある。虚栄は果てなき砂の文字である。「自己」を誤解されまじとするは恕す、「自己」を真価以上に広告し、すべての他人を凌駕し得たりと自負するに至ッては最も醜怪、最も卑怯なる人格の発露である。虚栄の権化は時に人を威圧して崇敬の念を起こさしむ。神にも近しと尊ぶ人格は時に空虚である。真の偉人は飾らずして偉である。付け焼

き刃に白眼をくるる者は虚栄の仮面を脱がねばならぬ、高き地にあってすべてを洞察する時、虚栄は実に笑うに堪えぬ悪戯である。美を装い艶を競うを命とする女、カラーの高さに経営惨憺たる男、吾人は面に唾したい、食を粗にしてフェザーショールを買う人がある。家庭を破壊してズボンの細きを追う人がある。雪隠に烟草を吹かし帽子の型に執着する子供を「人」たらしむべき教育は実に難中の難である、ああ、かくして虚栄は人を魔境にさそい堕落の暗礁に誘うローレライである。

11. 魯迅「端午節」（1922、T11、井上紅梅訳）に見る「貼紙の大きな字」

彼はたちまちあの時のことを思い出した。金永生から追払（おっぱら）われて、ぼんやりとして稲香村（とうこうそん）（菓子屋）の前まで来ると、店先にぶらさげてある一斗桝（いっとます）大の広告文字を見た。「一等幾万円」にはちょっと心が動いたが、あるいは足の運びがのろくなったのかもしれん、とにかく蟇口（がまぐち）の中に残っているのはわずかに六十銭。実はそれを捨てかねたから思い切りよく遠のいたのだ。彼が顔色を変えると、方太太は彼女の無教育を怒ったのかと思って話の結末をつけずに退出した。方玄綽もまた話の結末をつけずに腰を伸ばして嘗試集を読み始めた。

12. 寺田寅彦「神田を散歩して」（1922、T11）に見る「明滅する仁丹の広告」

あるきわめて蒸し暑い日の夕方であった。神田（かんだ）を散歩した後に須田町（すだちょう）で電車を待ち合わせながら、見るともなくあの広瀬中佐（ひろせちゅうさ）の銅像を見上げていた時に、不意に、どこからともなく私の頭の中へ「宣伝」という文字が浮き上がって来た。

それはどういうわけであったかよくわからない。その日は特別な「何々デー」というのでもなかったし、途中で宣伝の行列や自動車に出会った覚えもない。おそらく途中の本屋の店先かあるいは電柱のビラ紙かで、ちらと無意識に瞥見（べっけん）したかあるいは思い浮かべたこの文字が、識域のつい下の所に隠れていて、それが、この時急に飛び出して来たのかもしれないと思う。もっともそれにしたところで、広瀬中佐の銅像を見ていたという事が、どういう機縁になってこれが呼び出される手続きになったのか、これに関する筋の立った説明はなかなか簡単でないように思われる。

それはとにかく、私はその待ちおおせて乗った電車の上で、この「宣伝」という文字に

ついて取り止めないいろいろの事を考えてみた。しかしその時はそれきりで、何を考えたという事さえ忘れてしまっていたが、その後二三日たったある日の夕方、駿河台下（するがだいした）まで散歩していた時に、とある屋根の上に明滅している仁丹（じんたん）の広告を見るとまた突然この同じ文字が頭の中に照らし出された。あの広告のイルミネーションが、せわしなくまたたきをするたびに色がぱっぱっと変わる、そのように私の頭の中でもいろいろの考えがまたたくように明滅した。

そこから帰る電車の中で、またこのあいだと同じようなまとまりのつかない考えを繰り返した。繰り返している間には、いくらかこのあいだとはちがった向きへも考えが分かれて進んで行った。それで結局は、何も別段得る物はなかったのであるが、でもせっかく考えた事だからと思って、ノートの端に書き止めておいた。その中のおもな事を改めてここに清書しておきたいと思う。

13. 愛知敬一「ファラデーの傳　電気学の泰斗」（1923、T12）に見る「窓に貼ってある講演会の告知ビラ」

（四　タタムの講義）

ファラデーはある日賑（にぎやか）なフリート町を歩いておったが、ふとある家の窓ガラスに貼ってある広告のビラに目をとめた。それは、ドルセット町五十三番のタタム氏が科学の講義をする、夕の八時からで、入場料は一シリング（五十銭）というのであった。

これを見ると、聴きたくてたまらなくなった。まず主人リボーの許可を得、それから鍛冶職をしておった兄さんのロバートに話をして、入場料を出してもらい、聴きに行った。これが即ちファラデーが理化学の講義をきいた初めで、その後も続いて聴きに行った。何んでも一八一〇年の二月から翌年の九月に至るまでに、十二三回は聴講したらしい。

14. 辻潤「ふもれすく」（1923、T12）に見る「金さえ出せば第一流の新聞が掲載する大ベラボーの売薬の広告」

野枝さんはらいてう氏の同情と理解によって、「青鞜」社員になって働いた。僕も時々らいてう氏を尋ねるようになった。そうして随分と厄介をかけたようだ。それから当時社内の「おばさん」といわれていた保持白雨氏、小林の可津ちゃん、荒木の郁さん、紅吉などという連中とも知り合った。「新しい女」は、吉原へおいらんを買いに行き五色の酒を呑ん

で怪気焔を吐き、同性恋愛の争奪をやり、若き燕を至るところで拵えるというような評判によってのみ世間へ紹介された。自然主義が出歯亀によって代表されたのと少しも変わりはなかったのである。だが、昔キリスト教が魔法使いと誤られて虐殺されたことを考えると、そんなことはなんでもないことなのかも知れぬ。近い話が大杉君だが、今でも社会主義といえばやたらと巡査とケンカをしたり、金持ちをユスッテ歩く壮士かゴロツキの類だと考えている連中がいるのだから助からない。中には社会主義だと称してそんなことばかりやって歩いている人間もあるのかも知れないが、それよりも堂々ともっともらしい大看板を掲げてヒドイことをやっている奴が腐る程あるのではないか。金さえ出せば大ベラボーの売薬の広告をでさえ第一流の新聞が掲載する世の中なのだ。

15. 岡本綺堂「月の夜語り」（1924、T13）に見る「便利な新聞広告」

E 君は語る。

僕は七月の二十六夜、八月の十五夜、九月の十三夜について、皆一つずつの怪談を知っている。長いものもあれば、短いものもあるが、月の順にだんだん話していくことにしよう。

そこで、第一は二十六夜――これは或る落語家（あるはなしか）から聞いた話だが、なんでも明治八、九年頃のことだそうだ。その落語家もその当時はまだ前座からすこし毛の生えたくらいの身分であったが、いつまで師匠の家（うち）の冷飯（ひやめし）を食って、権助同様のことをしているのも気がきかないというので、師匠の許可を得て、たとい裏店（うらだな）にしても一軒の世帯をかまえることになって、毎日貸家をさがしてあるいた。その頃は今と違って、東京市中にも空家（あきや）はたくさんあったが、その代りに新聞の案内広告のような便利なものはないから、どうしても自分で探しあるかなければならない。彼も毎日尻端折りで、浅草下谷辺から本所、深川のあたりを根（こん）よく探しまわったが、どうも思うようなのは見付からない。なんでも二間（ふたま）か三間ぐらいで、ちょっと小綺麗な家で、家賃は一円二十五銭どまりのを見付けようという注文だから、その時代でも少しむずかしかったに相違ない。

16. アミーチス「母を訪ねて三千里」（1926、T15、日本童話研究会訳）に見る「大きないろいろな色の旗」

出発してから二十七日目、それは美しい五月の朝、汽船はアルゼンチンの首府ブエーノスアイレスの都の岸にひろがっている大きなプラータ河に錨を下ろしました。マルコは気ちがいのようによろこびました。

「かあさんはもうわずかな所にいる。もうしばらくのうちにあえるのだ。ああ自分はアメリカへ来たのだ。」

マルコは小さいふくろを手に持ってボートから波止場に上陸して勇ましく都の方に向って歩きだしました。

一番はじめの街の入口にはいると、マルコは一人の男に、ロスアルテス街へ行くにはどう行けばよいか教えて下さいとたずねました、ちょうどその人はイタリイ人でありましたから、今自分が出てきた街を指（ゆびさ）しながらていねいに教えてくれました。

マルコはお礼をいって教えてもらった道を急ぎました。

それはせまい真すぐな街でした。道の両側にはひくい白い家がたちならんでいて、街にはたくさんな人や、馬車や、荷車がひっきりなしに通っていました。そしてそこにもここにも色々な色をした大きな旗がひるがえっていて、それには大きな字で汽船の出る広告が書いてありました。

マルコは新しい街にくる旅に、それが自分のさがしている街ではないのかと思いました、また女の人にあうたびにもしや自分の母親でないかしらと思いました。

17. 橋本五郎「自殺を買う話」（1927、S2）に見る「自殺を買う広告」

――妻らしき妻を求む。十八歳以上二十七八歳までの、真面目にして且（かつ）愛嬌あり、常識を有し、一生夫に忠実にして、血統正しく上品なる婦人ならば、貧富を問わず、妻として迎え優遇す。

当方三十一歳、身長五尺三寸、体重十三貫二百匁、強健にして元気旺盛、職業薬業、趣味読書旅行観劇其他、新時代の流行物。禁酒禁煙。将来の目的、都会生活を営み外国取引開始。

保護者の許可を経て、最近の写真、履歴書、本人自筆の趣味希望等、親展書にて申込ありたし――。

そんな広告に微笑しながら、新聞の案内広告を見ていた私は、その雑件と云う条（くだり）に至って、思わず新聞をとり直した。

── 自殺買いたし、委細面談。但し善良なる青年のものに限る。××町野々村──。

私が驚いたのは、その要件の奇抜よりも、該広告主の姓名に於てだ。××町と云えば、かの墓場と酒場の青年画家、私には親しい友人であるところの、野々村新二（ののむらしんじ）君より他にはない筈（はず）。

とまれ尋常の沙汰ではないぞ、と私が瞬間感じたのは、彼（か）の野々村君の平素と云うのが、こうした青年達のそれとはかけ離れて、至って平々凡々（へいへいぼんぼん）たるものであったからだ。

18. 宮島資夫「四谷、赤坂」（1927、S2）に見る「薬屋の本能」

（絵双紙屋）

日清戦争後、大横町の角に、永田という薬屋が出来た。銅張りの建築で、その時分は全く珍しく、周囲の古ぼけた建物の中に異彩を放った。主人は四谷在住の男ではなかったらしい。が、薬屋らしい山気と広告本能が強かったのであろう。開店祝いの時には、武源楼といった料理屋に、知人を招待して四谷芸妓を総揚げにして、揃いの裾模様の着物を着せて、踊りをおどらせたものであった。

19. 宮武外骨「一円本流行の害毒と其裏面談」（1928、S3）に見る「円本広告問題」

広告不信認の悪例を作りし罪

新聞紙上の広告文に誇大と虚偽を並べたものが続出するので、愚直な読者もソー〳〵は欺かれず、年を追って広告は不信認と成り、新聞読者の増加率に逆比例して広告の効力は漸次薄弱となりつつある今日、広告不信認の悪例は、単に円本のみには限るまい、彼の講談社などが「満天下の熱狂的歓迎」と云っても、誰一人信ずる者はなく、「売切れぬ内にお早く〳〵」と云っても、急いで買いに行く者はあるまい、と難ずる人もあらんかなれど、講談社の如きヤシ的出版屋の広告はそれにしても、従来然らざりし社名を以て大々的一頁の広告、シカモ前例のない一円本の宣伝、講談社の広告には欺かれない連中も、ツイ、ヒッカカリて馬鹿を見るに至り、今後は如何なる広告も信認するに足りないものとの悪例を示した事実は確な所であろう、要は円本出版屋が悪例の上塗（うわぬり）をしたものと見

ればよい

批評不公平の悪習を促せし罪

新聞社が営利事業に化して以来、主張も見識もゼロに成り、編集部が営業部に支配さるるに至り、財源たる広告料の収入に成る事であれば、詐欺広告をも知らぬ顔で載せ其被害投書がイクラ来ても没にするなど、スリの上前を取るような方針であるから、広告料の大増収を得た円本の攻撃文などは一行の記事にも載せないのみか、反って流行を煽（あおる）ソソリ文句を並べたり、批評らしく書いてクダラヌ全集物の提灯持をしたので、それに釣られて予約の申込みをした者も少くはない、サテ現物を読んで見ると、面白くもないとか、訳が判らぬとかで投げ出す事に成り、破約する事に成ったのである、そこで新聞紙上の批評文などはアテにならぬものと、初めて知ったコケ共が多い、これも円本出版屋が旧来の悪習を助成したのであって、ヤハリ上塗の罪を重ねたものと見ればよい

20. 小酒井不木「闘争」（1929、S4）に見る「新聞の暗号広告」

それから今一つ、話の序（ついで）に、君が嘸（さぞ）聞きたがっているだろうと思う、例の新聞広告、とだしぬけに言ったのではわかるまいが、今から一ヶ月半ほど前に、都下の主な新聞の三行広告欄へあらわれた不思議な広告

PMbtDK

の種明しをもしようと思う。こう言うと、君は定めし不審に思うだろうが、あの広告は、実は僕が出したものだ。君よ、驚いてはいかぬ。詮索好きの君は、あの当時、よく僕の教室へ来て誰が、何のために出して、どういう意味があるだろうかと、色々推定を行（や）ってきかせてくれたものだ。僕は君に感附かれないように、つとめて知らぬ顔を装って居たのだが、あれこそ、先生の憂鬱の原因と関係があって、その当時は絶対の秘密を要したことだから、僕は自分ながら感心するほど、よく自制したよ。が、今はそれを自由に物語ることが出来るのだ。君も、きっと喜ぶだろうが、僕もうれしい気がする。

K君。

君はよく記憶して居るだろう。郊外Mに文化住宅を構えて居た若き実業家北沢栄二の自殺の一件を。一旦自殺として埋葬されたのを、警察の活動によって、未亡人政子

（みぼうじんまさこ）とその恋人たる文士緑川順が、他殺の嫌疑で拘引され、死骸の再鑑定をすることになったが、鑑定の結果、やはり自殺と決定されて二人は放免され、事件は比較的平凡に片づいてしまった。あの鑑定は主として僕がやったけれど、実はあの事件の底には、もっと〳〵奥深いものがかくされて居て、それがやがてあの謎の広告と密接な関係を持って居るのだ。というと、察し深い君は、あの事件がやはり他殺だったのかと思うであろう。そうだ。思い切って言えば、やはり一種の他殺だったのだ。が、それはたしかに普通の場合とは異って居るので、それがあの謎の広告となったのだが、とに角、こういう訳で、毛利先生の憂鬱の原因は、間接に北沢事件だとも言い得るのだ。

21. 林不忘「仇撃たれ戯作」（1934、S9）に見る「御著作の中に広告」

六樹園石川（いしかわ）雅望（まさもち）は、このごろいつも不愉快な顔をして、四谷内藤新宿の家に引き籠って額に深い竪皺を刻んでいた。

彼はどっちを向いても嫌なことばかりだと思った。陰惨な敵討の読物が流行するのが六樹園は慨嘆に耐えなかったのである。

客あれば彼はよくこの風潮を論じて真剣に文学の堕落を憂えたものであった。

一度三馬が下町の真ん中からぶらりとこの山の手の六樹園大人（たいじん）を訪れたことがあった。文化三年の火事に四日市の古本店を焼け出されて、本石町新道（ほんこくちょうじんみち）に移ってからで、式亭しきてい三馬はその戯作道の頂天にある時代だった。酒飲みで遊び好きの三馬は、またよく人と争い、人を罵って、当時の有名な京伝（きょうでん）、馬琴（ばきん）などの文壇人とも交際がなかった。ことに曲亭（きょくてい）とは犬猿の仲であった。馬琴の眼には三馬などは市井（しせい）の俗物としか映らなかったし、三馬は馬琴をその傲岸憎むべしとなしていた。この驕々たる三馬が一日思い立って日本橋から遠い四谷の端れまで駕輿（かご）をやったのは、狂歌師宿屋（やどや）飯盛（めしもり）としての雅望と、否、それよりも六樹園の本来の面目である国文学の研究に少からず傾到するところがあったからだ。

婢（ひ）が書斎の六樹園の許に刺を通じて、

「菊池太助さまとおっしゃる方がお見えになりましてござりますが。」

と言った時六樹園は誰だかわからなかった。もう一度訊き返せと命じて婢を玄関へ去らせた。するとすぐ引きかえして来て、

「しゃらくさい、とおっしゃるだけで。」

と女中は口を覆って笑った。

「洒落斎（しゃらくさい）、おう、式亭どのか。」

と六樹園はその一代の名著雅言集覧（がげんしゅうらん）の校正の朱筆を投じて立って三馬を迎い入れた。

語る相手欲しい時だったので六樹園は雀躍（じゃくやく）せんばかりで、談はすぐ最近の文壇の傾向へ入って行った。

どうせ無頼な戯作者だと六樹園は三馬を卑しめて見ていたが、この男と言葉を交える前に日頃から不審に耐えないと思っている彼の態度についてまずこの機会に訊いてみたいと六樹園は思った。

で、話が進む前に六樹園は切り出した。

「尊家は仙方延寿丹（せんぽうえんじゅたん）、または江戸の水とやら申す化粧水を売り出し、引札を書き、はなはだしきは御著作の中にその効能を広告なさるということですが、真実（ほんとう）ですか。もしほんとうならどういうおこころでそういうことをなさるるかそれを伺いたい。」

三馬は意外だという顔をした。

「さようなことは私ばかりではげえせん。京伝の煙草入れ、煙管（きせる）、近くは読書丸、ともに自ら引札も書き、また作品のなかで広告をいたしておりやす。」

「いや、山東氏は山東氏として、足下のお気持を聞きたいのです。」

「人間は何でも売る物が多ければ多いほど生活（くらし）がよくなりやすからな。延寿丹も江戸の水も、私の戯作も、みなこれ旦暮（たんぼ）の資のためでげす。」

三馬はけろりとして答えた。六樹園は喫驚（きっきょう）して客の顔を見つめた。

「なにごとも生活（たつき）のためと仰せらるる。」

「さよう。大人の御勉強、御著述も、早く言えば生活のためでげしょう。」

「いや、拙（せつ）はさようなことは考えませぬ。拙は文学道のためにのみ筆をとります。」

六樹園は昂然として言った。今度は三馬がびっくりした。

「文学道 ── さようなものはどこにあるか一度めぐり会いてえものでげす。」

と三馬はにたにたして語をつないだ。

「なるほど、六樹園大人は小伝馬町の名だたる旅亭（りょてい）糠屋（ぬかや）のおん曹子ぞうし、生涯衣食に窮せぬ財を擁してこそ、はじめて文学道の何のときいた風な

口がきけやす。文を売って右から左に一家の口を糊（のり）する輩は、正直に売文を名乗ったほうがまだ茶気があるだけでも助かりやす。」

ずいぶんものの考え方が違うものだと六樹園は思った。度し難い気がして黙ってしまった。同じ文字のことに携（たずさ）わってながらこんなに立場が違うのはどういうわけであろうと倉皇（そうこう）のあいだに考えてみた。すると三馬がいま言った生活という言葉が深く自分の心に残っているのに六樹園は気がついた。

それはこの雅言集覧などにはおよそ収録することのできない、巷の埃（ほこり）臭い言語だと思った。だが、その生活という言葉のどこかに生々しい光沢（つや）があって、それが六樹園に今まで知らなかった新しい光りものを見せられたような感じを起させた。

はじめから気持が食い違って主客はちょっと気まずい無言をつづけていた。

22. 小熊秀雄「送り狼として」（1935、S10）に見る「広告する権利」

送り狼として

ブルジョア詩人よ
君たちは何時も家柄を吹喋（ママ）してゐる
子々孫々からの
詩の技術の継承者として誇つてゐる、
だがプロレタリア詩人はちがふ、
我々は詩人の後つぎではない
すべてが新しい出発者、
我々は単なる民衆の息子としての詩人だ、
我々には君達のやうに
他人に詩人を広告する権利や
気儘に放蕩や放埒を
市民の中でふりまはす
横柄さを誰からも許されてゐない、
君らはチラリと見せて
スッと通つてゆく
良い門鑑を持つてゐる

君はそこへ人間の節操や、
奉仕やを売りに行つたらよい
おかしなことには
君のパトロンは
君の売り物に
カビが生えてゐるといつて品物を突き返す
そこで君等は声の合唱をもつて泣く
── 詩の社会的地位はない、
── 詩の商品的価値が落ちた、と
これらの不平不満を
おゝ、御用商人、
君たちは将来何世紀にわたつて
繰り返へさうとするのか、
君たちは既にあらゆるものに
君たちのパトロンにさへ
多年の御愛顧を失つた
あわて給ふな、詩人たちよ、
詩壇復興は何時の場合にも
プロレタリア詩人の側から ──、
あわてるよりも一応は利巧で
結局は愚劣な君の製品の
裏表をかへしてよつく吟味し給へ、
かなしみ給ふな詩人たちよ、
当分は女の子の
崇拝の的ともなれるだらうから、
巨大な建物を威張つて通るさ、
老いては駑馬にすぎざる詩人も
尚且つ詩人といふ
門鑑を手放さない、
我々プロレタリア詩人は
君たち詩人を

断崖まで送つてゆかう、
我々は永久に君の背後を去らない、
親しい友情をもつてゐる、
それは送り狼としての友情を ――。

23. 蘭郁二郎「魔像」（1936、S11）に見る「あくどい色の旗」

寺田洵吉（てらだじゅんきち）は今日も、朝から方々職を探してみたが、何処にもないとわかると、もう毎度のことだったが、やっぱり、又新たな失望を味って、当（あて）もなく歩いている中、知らず知らずに浅草公園に出ているのであった。

――これは寺田の「淋しい日課」だった。郷里（くに）で除隊されると、もう田舎で暮すのがバカバカしくてならず、色々考えた末、東京のタッター人の叔父を頼って、家を飛出しては来たものの、叔父の生活とて、彼を遊ばせておくほどの余裕はなかった。そして、彼の淋しい日課は始まったのだ。

寺田は、溜息と一緒に公園へ出ると、なかば習慣的に瓢箪（ひょうたん）池に突出した藤棚の下に行き、何処かでメタン瓦斯（めたんガズ）の発生（わく）ような、陰惨な音を聴きながらぼんやりとして、あくどい色をした各常設館の広告旗が、五彩の暴風雨（あらし）のように、やけにヒステルカルに、はたはたと乱れるのを見詰めていた。
（相変らず凄い人出だなア ――）

24. 正宗白鳥「軽井沢にて」（1942、S17）に見る「掲示板の貼紙」

私は、散歩の途上、おりおり郵便局の横の掲示板のさまざまな貼紙を見ることがある。商店の広告や、失せ物拾い物の知らせのそばに、動物愛護会や人道会の主意書の掲げられているのは、いかにも軽井沢らしく思われる。

25. 織田作之助「アド・バルーン」（1946、S21）に見る「軽気球」

亀やんは毎朝北田辺から手ぶらで出てきて河堀口こぼれぐちの米屋に預けてある空の荷車を受けとると、それを引っぱって近くの青物市場へ行き、仕入れた青物つまり野菜類をその車に載のせて、石ヶ辻や生国魂いくたま方面へかけて行商します。私はその米屋の二

階に三畳を間借りして、亀やんの顔が見えると、いっしょに出かけて、その車の先引きをすると、一日七十銭になりました。ところが、三月ばかりたつと、亀やんはぽっくり死んでしまったので、私はまた拾い屋になろうと思って、ガード下の秋山さんを訪れると、もう秋山さんはどこかへ行ってしまったのか、姿を消していました。井戸水を貰っていた百姓家の人に訊いても、秋山さんが出入りしていた屑屋に訊きいても判らない。

空には軽気球がうかんでいて、百貨店の大売出しの広告文字がぶらさがっていた。とぼとぼ河堀口へ帰って行く道、紙芝居屋が、自転車の前に子供を集めているのを見ると、ふと立ち停って、ぼんやり聴いていたくらい、その日の私は途方に暮れていました。ところが、聴いているうちに、ふと俺ならもっと巧く喋しゃべれるがと思ったとたん、私はきゅうに眼を輝かせました。翌日から私は紙芝居屋になりました。

26. 太宰治「小説　ヴィヨンの妻」（1947、S22）に見る「人に対して誉める」

「いや、まったく、笑い事では無いんだが、あまり呆れて、笑いたくもなります。じっさい、あれほどの腕前を、他のまともな方面に用いたら、大臣にでも、博士にでも、なんにでもなれますよ。私ども夫婦ばかりでなく、あの人に見込まれて、すってんてんになってこの寒空に泣いている人間が他にもまだまだある様子だ。げんにあの秋ちゃんなど、大谷さんと知合ったばかりに、いいパトロンには逃げられるし、お金も着物も無くしてしまうし、いまはもう長屋の汚い一部屋で乞食みたいな暮しをしているそうだが、じっさい、あの秋ちゃんは、大谷さんと知合った頃には、あさましいくらいのぼせて、私たちにも何かと吹聴していたものです。だいいち、ご身分が凄い。四国の或る殿様の別家の、大谷男爵の次男で、いまは不身持のため勘当せられているが、いまに父の男爵が死ねば、長男と二人で、財産をわける事になっている。頭がよくて、天才、というものだ。二十一で本を書いて、それが石川啄木たくぼくという大天才の書いた本よりも、もっと上手で、それからまた十何冊だかの本を書いて、としは若いけれども、日本一の詩人、という事になっている。おまけに大学者で、学習院から一高、帝大とすすんで、ドイツ語フランス語、いやもう、おっそろしい、何が何だか秋ちゃんに言わせるとまるで神様みたいな人で、しかし、それもまた、まんざら皆うそではないらしく、他のひとから聞いても、大谷男爵の次男で、有名な詩人だという事に変りはないので、こんな、うちの婆まで、いいとしをして、秋ちゃんと競争してのぼせ上って、さすがに育ちのいいお方はどこか違っていらっしゃる、なんて言って大

谷さんのおいでを心待ちにしているていたらくなんですから、たまりません。いまはもう、華族もへったくれも無くなったようですが、終戦前までは、女を口説くには、とにかくこの華族の勘当息子という手に限るようでした。へんに女が、くわっとなるらしいんです。やっぱりこれは、その、いまはやりの言葉で言えば奴隷根性というものなんでしょうね。私なんぞは、男の、それも、すれっからしと来ているのでございますから、たかが華族の、いや、奥さんの前ですけれども、四国の殿様のそのまた分家の、おまけに次男なんて、そんなのは何も私たちと身分のちがいがあろう筈が無いと思っていますし、まさかそんな、あさましく、くわっとなったりなどはしやしません。ですけれども、やはり、何だかどうもあの先生は、私にとっても苦手にがてでして、もうこんどこそ、どんなにたのまれてもお酒は飲ませまいと固く決心していても、追われて来た人のように、意外の時刻にひょいとあらわれ、私どもの家へ来てやっとほっとしたような様子をするのを見ると、つい決心もにぶってお酒を出してしまうのです。酔っても、別に馬鹿騒ぎをするわけじゃないし、あれでお勘定さえきちんとしてくれたら、いいお客なんですがねえ。自分で自分の身分を吹聴するわけでもないし、天才だのなんだのとそんな馬鹿げた自慢をした事もありませんし、秋ちゃんなんかが、あの先生の傍で、私どもに、あの人の偉さに就いて広告したりなどすると、僕はお金がほしいんだ、ここの勘定を払いたいんだ、とまるっきり別な事を言って座を白けさせてしまいます。あの人が私どもに今までお酒の代を払った事はありませんが、あのひとのかわりに、秋ちゃんが時々支払って行きますし、また、秋ちゃんの他にも、秋ちゃんに知られては困るらしい内緒の女のひともありまして、そのひとはどこかの奥さんのようで、そのひとも時たま大谷さんと一緒にやって来まして、これもまた大谷さんのかわりに、過分のお金を置いて行く事もありまして、私どもだって、商人でございますから、そんな事でもなかった日には、いくら大谷先生であろうが宮様であろうが、そんなにいつまでも、ただで飲ませるわけにはまいりませんのです。けれども、そんな時たまの支払いだけでは、とても足りるものではなく、もう私どもの大損で、なんでも小金井に先生の家があって、そこにはちゃんとした奥さんもいらっしゃるという事を聞いていましたので、いちどそちらへお勘定の相談にあがろうと思って、それとなく大谷さんにお宅はどのへんでしょうと、たずねる事もありましたが、すぐ勘附いて、無いものは無いんだよ、どうしてそんなに気をもむのかね、喧嘩けんかわかれは損だぜ、などと、いやな事を言います。それでも、私どもは何とかして、先生のお家だけでも突きとめて置きたくて、二、三度あとをつけてみた事もありましたが、

そのたんびに、うまく巻かれてしまうのです。そのうちに東京は大空襲の連続という事になりまして、何が何やら、大谷さんが戦闘帽などかぶって舞い込んで来て、勝手に押入れの中からブランデイの瓶なんか持ち出して、ぐいぐい立ったまま飲んで風のように立ち去ったりなんかして、お勘定も何もあったものでなく、やがて終戦になりましたので、こんどは私どもも大っぴらで闇の酒さかなを仕入れて、店先には新しいのれんを出し、いかに貧乏の店でも張り切って、お客への愛嬌あいきょうに女の子をひとり雇ったり致しましたが、またもや、あの魔物の先生があらわれまして、こんどは女連れでなく、必ず二、三人の新聞記者や雑誌記者と一緒にまいりまして、なんでもこれからは、軍人が没落して今まで貧乏していた詩人などが世の中からもてはやされるようになったとかいうその記者たちの話でございまして、大谷先生は、その記者たちを相手に、外国人の名前だか、英語だか、哲学だか、何だかわけのわからないような、へんな事を言って聞かせて、そうしてひょいと立って外へ出て、それっきり帰りません。記者たちは、興覚め顔に、あいつどこへ行きやがったんだろう、そろそろおれたちも帰ろうか、など帰り支度をはじめ、私は、お待ち下さい、先生はいつもあの手で逃げるのです、お勘定はあなたたちから戴きます、と申します。おとなしく皆で出し合って支払って帰る連中もありますが、大谷に払わせろ、おれたちは五百円生活をしているんだ、と言って怒る人もあります。怒られても私は、いいえ、大谷さんの借金が、いままでいくらになっているかご存じですか？　もしあなたたちが、その借金をいくらでも大谷さんから取って下さったら、私は、あなたたちに、その半分は差し上げます、と言いますと、記者たちも呆れた顔を致しまして、なんだ、大谷がそんなひでえ野郎とは思わなかった、こんどからはあいつと飲むのはごめんだ、おれたちには今夜は金は百円も無い、あした持って来るから、それまでこれをあずかって置いてくれ、と威勢よく外套を脱いだりなんかするのでございます。記者というものは柄が悪い、と世間から言われているようですけれども、大谷さんにくらべると、どうしてどうして、正直であっさりして、大谷さんが男爵の御次男なら、記者たちのほうが、公爵の御総領くらいの値打があります。大谷さんは、終戦後は一段と酒量もふえて、人相がけわしくなり、これまで口にした事の無かったひどく下品な冗談などを口走り、また、連れて来た記者を矢庭に殴って、つかみ合いの喧嘩をはじめたり、また、私どもの店で使っているまだはたち前の女の子を、いつのまにやらだまし込んで手に入れてしまった様子で、私どもも実に驚き、まったく困りましたが、既にもう出来てしまった事ですから泣き寝入りの他は無く、女の子にもあきらめるように言いふくめ

て、こっそり親御の許もとにかえしてやりました。大谷さん、何ももう言いません、拝むから、これっきり来ないで下さい、と私が申しましても、大谷さんは、闇でもうけているくせに人並の口をきくな、僕はなんでも知っているぜ、と下司げすな脅迫がましい事など言いまして、またすぐ次の晩に平気な顔してまいります。私どもも、大戦中から闇の商売などして、その罰が当って、こんな化け物みたいな人間を引受けなければならなくなったのかも知れませんが、しかし、今晩のような、ひどい事をされては、もう詩人も先生もへったくれもない、どろぼうです、私どものお金を五千円ぬすんで逃げ出したのですからね。いまはもう私どもも、仕入れに金がかかって、家の中にはせいぜい五百円か千円の現金があるくらいのもので、いや本当の話、売り上げの金はすぐ右から左へ仕入れに注ぎ込んでしまわなければならないんです。今夜、私どもの家に五千円などという大金があったのは、もうことしも大みそかが近くなって来ましたし、私が常連のお客さんの家を廻ってお勘定をもらって歩いて、やっとそれだけ集めてまいりましたのでして、これはすぐ今夜にでも仕入れのほうに手渡してやらなければ、もう来年の正月からは私どもの商売をつづけてやって行かれなくなるような、そんな大事な金で、女房が奥の六畳間で勘定して戸棚の引出しにしまったのを、あのひとが土間の椅子席でひとりで酒を飲みながらそれを見ていたらしく、急に立ってつかつかと六畳間にあがって、無言で女房を押しのけ引出しをあけ、その五千円の札束をわしづかみにして二重まわしのポケットにねじ込み、私どもがあっけにとられているうちに、さっさと土間に降りて店から出て行きますので、私は大声を挙げて呼びとめ、女房と一緒に後を追い、私はこうなればもう、どろぼう！　と叫んで、往来のひとたちを集めてしばってもらおうかとも思ったのですが、とにかく大谷さんは私どもとは知合いの間柄ですし、それもむごすぎるように思われ、今夜はどんな事があっても大谷さんを見失わないようにどこまでも後をつけて行き、その落ちつく先を見とどけて、おだやかに話してあの金をかえてしてもらおう［#「かえしてもらおう」は底本では「かえてしてもらおう」］、とまあ私どもも弱い商売でございますから、私ども夫婦は力を合せ、やっと今夜はこの家をつきとめて、かんにん出来ぬ気持をおさえて、金をかえして下さいと、おんびんに申し出たのに、まあ、何という事だ、ナイフなんか出して、刺すぞだなんて、まあ、なんという」

27. 牧野富太郎「寒桜の話」（1947、S22）に見る「観光地が馬力をかけて集客できること」

これは言うべくして容易に行なうことのできるなんでもないことがらであるから、私は同地の繁栄のため早くこの二つの赤、白サクラを栽えられんことをお奨めして止まない。マーやってごらんなさい。きっと当たるよ。そして後にはようこそ植えたということになる。

そこで熱海でしかるべき地を相して、寒桜を各方へ分散して植えずにこれを一区域へ列植して一群の林を作る。それから一方の緋寒桜も同様これを方々へ分植せずに、これも一群の林となるように列植する。そしてなるべくはこの二桜林を左右か上下かに接近させる。

まもなくそれが生長し花を開くようになると一方は白いサクラ、一方は赤いサクラと咲き分けになり、それが二月頃同時に開くから熱海では赤白咲き分けのサクラがはや咲いているとて大評判となり、この機逸すべからずと同地の宿屋連中が馬力をかけて大いに広告すれば、そら行って花見をせよやとお客がわれ劣らじと四方八方からワンサワンサと押しかけ来たり、宿屋はたちまちみな満員、桜の林には人だかり、とても同地は賑わうことであろうと信ずる。

こんな天然物を利用して繁栄を策することは、永久的のものであって一時的なものでなく策の最も上乗なものである。私は熱海人士に熱海人士が大いに私のこの献策に耳を傾けられんことを願いたいとは、ずっと以前から私の熱海をおもう老婆心であったのである。

ところがさすが同地にもやはり具眼の人々があって近来寒桜の苗木を多数用意しだいぶこれを同地に植えたのである。しかし残念なことにはその苗木が諸方にばらばらに植えられてあるので私の意見とはちょっと相違している。かくこれをばらばらに植えてそこにチョボリここにチョボリでは引き立たない。どうしてもこれはそれを一所に群栽して、それはちょうど梅林のように、それを桜林とせねばせっかくの努力もたいした好結果を持ちきたさないことを私はひそかに憂えている。

28. 木村荘八「東京の風俗」（1949、S24）に見る「屋外広告・ネオンサイン」

九、広告

――この原稿を書きに向はうとするいま、にはかに雷鳴とゞろき渡る。「雷鳴」を聞く耳にも新らしい思ひの生じたことを感じるのは、昔の五月雨に伴ふ初雷はひたすら爽快音だ

つたのに引きかへ、いま聞くかみなりの音は、どうしても過ぐる日の爆撃音と、その日の追憶を新たにせずにゐない。

この五月初め（昭和廿二年）に東京鉄道局が主催して、主として鉄道各駅の構内に人目を誘ふ広告板、ポスターの類を、選にかけて、一等、二等など、その出来栄えの等級を明かにする企てを試みたのは有意義のことだつた。選賞されるものゝ主意が広告のことであるから、この審査に一途に美術を以て臨むことは出来ないまでも、いはゆる「街頭美術」といふ角度から、醜ならざるもの、そしてそこに「広告」技術の伴ふもの、これが選に上つたことはいふまでもない。如何に「目に付く」ことが主意だといつても、劣悪醜怪な意匠に横行されては、道行くわれわれの眼がたまらない。昔の汽車の沿線には、至るところ、大きな酒だるの絵だとか、気味の悪いフクスケのやうなものが、青田涼しき中に大々と広告板でがん張つて、車窓からの眼をおほはせたものだつた。

五月の広告選賞の結果は、早速新橋駅ホームなどに公表されて、その広告の現品もそれぞれ駅に等級を示して張出されたから、東京の人の、眼にされた方もあつたらう。

街頭美術に公知の前で等級がついて示されたといふことに、年代記風な意味があつた。試みに思ひ給へ。昔の東京 ── を問はず、日本全国、中国、満洲にも ── はんらんした。例へば「仁丹」の、ひげをはやした礼服の人物の胸像は、街頭美術として選賞したならば、何等ぐらゐに入つただらうか。あるひはゼムのひし形の顔だとか、大学眼薬の眼鏡をかけた顔とか、花王石けんのしやくれた月形の横顔、さかのぼつては煙草のオールドの勧進帳を読む弁慶の像など……

かう数へて来ると、かういふ点では一長ある外国人の、ヴィクターの小首をかしげた白犬であるとか、ジレットの涼しさうに顔をそる広告絵などといふものは？　衆目の見るところ、選に入るやうである。カルピスの「初恋の味」にかけた名代の標語を案出した人は、会社から賞与の万年年金を受けたとか聞いたことがあつたが、さて果して、その標語に添へた絵のクロンボの図案は、よく万年年金に値したかどうか。

一体「広告」は広ク告グルであるから、大なり小なり響きの強いわけで、昔の広目屋であるとかセイセイヤカンの街頭音楽を持出すまでもなく、人の眼ばかりでなく、記憶に、相当浸み透る作用をするものである。殊に少年少女の頭には浸み易い。標語の「今日はお芝居、明日は三越」なども忘れ難い。── といつて、これが浸み透つたからといつて、ひとが遊惰に走る手もあるまいが ── ぼくは少年の頃に、日本橋通りを馬車で通ると、街のある家の軒先きに横書きの文字があつて「ぬけまにまんほらたふいとぬけま」と読めたのを、いつもその前を通るたびに楽しんだことがあつた。これはかへりに、同じ処を逆に馬

車で通ると、こんどはこの言葉のまともの意味に読めるのだつた――「まけぬといふたらほんまにまけぬ」、わん・ぷらいす・しよつぷとか云つた家の、軒の横がきの広告――また、銀座の洋服店大民の飾窓に、大礼服の、始終それがぐるぐる廻つてゐる、等身大の人形があつたことや、鉄道馬車が石町から通りへ大曲りに曲る角のところ――従つてそこは馬車が時間をとるから、長く視線のとゞまる一角――に、土蔵があつて、そこの白壁へもつて来て、麻かみしもの老人が、両手にビンをつかんで笑ひ顔をしてゐる、大きな絵が描いてあつた。今でもこの銘酒「雪月花」の老人の、八方にらみの眼は、忘れることが出来ない。

十、ネオンサイン

新聞の広告欄に「ネオンサイン外務社員」若干名募集と見かけるやうになつた。ネオン・サインは都市の生活に必須急用のものではないが、明らかに不急なだけに、却つて、復興生活には必要だといふ逆説も成立つのだらう。大正年度以来ネオンの無い夜の都会は、生活の休業か、「非常時」かを意味することになつた。文字通り「非常時」を迎へたゝめに、この四、五年のところ、ネオンは消えたのであつた。そして危く消えッぱなしになりかねなかつたとたれにいへよう。

今朝、何気なく窓から外を見てゐると、昔ながらの節の付いた呼び声で、コーモリや、コーモリ直し、と、町を呼んで歩く「売り声」を聞いて、何かしらんホツとしたやうな心持がした。昔の東京の朝は、五月のさはやかな風の中を、金魚屋であるとか、苗売りなどの呼声が、季節の訪れに通つたものだつた。苗売りの美声はその後まだ聞かない。……

ネオン・サインの始めは静止的で却つて人目を引いた。やがて銀座に引続いて大規模のカフェーが出来るやうになると、これは何れも派手なネオン装飾で歩道をも昼のやうに明るくし、概してその色は、原始的な赤と青で、大阪資本を思はせ、カフェーが一軒づつ増えるたびに、東京は関西方の東漸勢力に押される気色を見せたものである。

丁度そのころ、京橋の角に点ぜられたゼネラル・モーターズの大広告燈は、文字と絵が光のうづのやうに夜空を駈け廻る、大がかりのネオン装置で、その色燈がまた「関西色」とは違つた、程よく間色を交へたもので、見る眼に涼しく、ネオンの一新機を劃したものだつた。そしてこれがぱつたり消えた時に、日本は真黒な戦雲に閉ざされたのであつた。

ぼくの知つた燈火広告の最も古いものは、明治卅年見当に、横山町の商家筋で、町のもの日に限つて点ぜられた、葉茶屋の店頭広告であるが、それは大きく「茶」の字をヒサシ屋根の上に、光で現はしたもので、「光」といふのは、火ぐちから一つづつボーボー吹き出

すガスであつた。それを文字形に連結した細工である。とんと今でいへばガスコンロの火を遠目に見たやうな形の、そばへ行くと、ゴーゴーものすごい音がして、風の少し強い晩は、字形は半分以上吹き飛ばされて読めなくなる……原始的なものだつた。しかし心うれしく見たものであつた。

まへに述べた、雪月花の広告壁画の目立つた石町の曲り角には、やがて時代が変ると、こんどは屋根のうへの大招牌に、ペンキ絵の、これも大きな人物画が、宗匠帽子の柔和な老人となつて現はれ、そのわきに句が入れてあつた。「江戸の気に今日はなりけりのりの味」と。のりやの広告ででもあつたものか。

この絵は、現存六十翁の斯界の先達が、壮年のころに執筆した大作だつたといふことである。その人の名を長谷川カズヲといふ由。

29. 中井正一「脱出と回帰」（1951、S26）に見る「広告の手段としての芸能・スポーツ」

（歪んだ推移）

人間が人間を所有するという、歴史の中の侮辱である社会現象が起った時、この生活よりの遊離はいろいろの姿で起っている。

現実の飢えをしのぐための営みを遊離して、その業だけを追求していく人々は、非常に稀にではあるが、貴族階級中の優秀なものであるか、奴隷の中にそのことだけに専門に鞭のもとで追求しなければならないものたちの中に、閉じこめられた。

奈良朝の朝貢物としての技芸家と平安朝の公卿の宗派の機構はそれである。ローマのコロシウムに出場する闘士としての奴隷たちは、長い伝統を今の球場のプロフェショナル・リーグ戦、拳闘のリングに尾を引いているが、生命を貴族の眼前におとすことすらをもって、人間の娯楽を構成していたのである。

封建時代のおかかえ力士的な領主専属の、プロフェショナル行為は、剣士もそうであるように、これを美しく表現して、六芸、すなわち、礼、楽、射、禦、書、数、といってはみるものの、それを修得して、そのもつ娯楽性が、米の額でもってあがなわれ、それがただ一つの食うたつきであったことは、いなむすべもなく、そのかかえている領主も、いつか、かつて、おかかえの一芸に秀でたもの、例えば、鎗一筋でもって、その家柄となったものであるようなおたがいであることはまちがいないのである。宮本武蔵が、主君をいろいろ変えているが、領主になるほどの器量でない一芸の士であり、巌流島では、大衆にか

たずをのませ、今もなお、大衆の娯楽の種になって、映画会社の弗箱（ドルばこ）となっているのである。

市民主義の時代になってくると、すべて協会とか何とかいっているけれども、これらすべての芸能、さらにスポーツ、相撲にせよ、ベースボール、ボクシングにせよ、競馬、競輪などに、利潤の機構の中に、あるいは、広告の手段とし、松竹ロビンスなどとしてのプロフェショナルなものに解体して変形されてゆく。国際的オリンピックでさえ、また新聞利潤の高度な対象となっていくのである。

弓絃に偶然ふれた、渓谷の原始人の愕きよりはじまった音楽も、今は一人一人の芸術家にはマネージャーと称するブローカーがついていて、大劇場、また映画会社との契約金の大きなメールストルームの渦巻の中に、眩めく思いを、みんなしているのである。

娯楽は、なるほど一応生活よりの脱出である。しかし、時代はいつも、この人間の脱出の道を心得て、その道筋に「わな」をかけるのである。それが歴史の狡智（リスト）である。

映画、レコード、ラジオ、新聞とのタイアップが、時には、その「わなの道」に人間を追い込み「利潤対象としての大衆」すなわち「ミーちゃんハーちゃん族、アロハアンちゃん族」を創造することすら、あえて辞さないのである。

生活よりの遊離は、実は宇宙の秩序の創造の探求であり、それは、実は人間性の本質への回帰であるべきであったのに、流離より流離へと、はてしもなき迷路が、娯楽の世界を支配している。いつになったら、人々は、アリアドネの糸をたどって、そのもとの入口に帰っていきはじめるのか。

30. 片山廣子「まどはしの四月」（1953、S28）に見る「広告文」

その小説はエンチヤンテッド・エプリル（まどはしの四月）といふ題であつたとおぼえてゐる。大正のいつ頃だつたか、もう三十年も前に読んで、題までも殆ど忘れてゐたが、二三日前にふいと思ひ出した。ロンドンで出版されて当時めづらしいほどよく売れた大衆もので、作者の名も今はわすれた。

郊外に住む中流の家庭の主婦が街に買物に出たかへりに、自分の属してゐる婦人クラブに寄つてコーヒーを飲み、そこに散らばつてゐた新聞を読む。新聞の広告欄に「イタリヤの古城貸したし、一ヶ月間。家賃何々。委細は〇〇へ御書面を乞ふ」と珍らしい広告文であつた。それを読んだその奥さんはごく内気な、まるで日本の古いお嫁さんみたいな古い

女であつたが、さびしい地味な家庭生活の中で、彼女がかうもしたい、ああもしたいと心のしん底でいつも思つてゐた事の一つがその時首をもちやげたのだつた。空想はその瞬間にイタリヤの古城に飛んで、何がしかの家賃を払つて、その古城を借り夢にも見たことのないイタリヤの四月の風光をまのあたり見たいと思ひ立ち、さて家賃を考へる。さうしてゐるところへ顔なじみのクラブ会員がまた新聞室にはいつて来る。今まで少しの交際もしなかつた夫人であるけれど、内気の夫人はこの人にその広告を見せる。「あなたこの古城に行つて見たいとお思ひになりませんか？　私たち二人でこの家賃を払つて？」その夫人もたちまちイタリヤに行きたくなる。二人は永年の親友のやうに仲よく並んで腰かけて細かくお金の計算をする。旅費、食費、家賃、それにコツクさんもお城に留守居してゐるから、彼女にも心付が入る、等々。二人の夫人は何かの時の用意に預けて置いた貯金を引出して、一生の思ひ出に今それを使つても惜しくないと思ふけれど、それにしてもお金がすこし足りない、彼等おのおのの夫には秘密にこの計画を実行したいと思ふので、くるしい工夫をする、どうしても足りない。

31. 坂口安吾「文化祭」（1954、S29）に見る「興行広告」

当日から信二の家が文化祭企画本部になって、青年団の幹事連中が集合する。外れても自分の損にはならないようだから、ノータリンの坊っちゃんが何をやらかすかと面白ずくも手つだって、別に不平を云う者もいなかった。

「ストリップだしたら、もうかるべい」

という意見が圧倒的であったが、かの苦行僧はこれを静かに制して、

「いけません。かりにも、文化祭ですよ。生活を高めるものが、文化です。ボクの意見としては、ジャズバンドと美貌の歌手をつれてきたいと思うのですが、それも純粋な芸人でなしに、大学生のジャズバンドですね」

「アナタの母校ですね」

「そういう関係は意味ないです。大学生のバンドにも本職ハダシのがあって、高給で一流キャバレーへ出演しているのもあるのです。その一流どころをよびましょう。美しい女子大学生の歌手が附属しているバンドを狙いましょう。東都一流の学生バンドと美貌のアルバイト歌手。日劇出演。青春の花形。微風と恋、恍惚のメロディ。こんな、広告、いかが？　三十円の入場料で最低千枚が目標です」

大半の人々はまさかと思っていた。どうせお流れだろうが、とにかくこれも一興と万事

を信二にまかせた。

信二は青年団の団長に正式の契約書数枚を作らせて、これを握って出演契約をとりに上京した。数日して、目的通り契約をとって戻ったばかりでなく、青春の花形、微風と恋、恍惚のメロディ云々というビラ百枚と入場券五千枚を持ってきた。印刷屋にも青年団の契約書を入れてきただけで、手金も払っていない。この借金を撃退するのが、また彼の後日のタノシミなのである。

信二は青年団の重役連三十名の男女に切符を分配して、

「近郷近在、手づるをもとめ、顔をきかせて、売れるだけ売って下さい。全力をあげることですね。売上げをあんまり使いこんじゃいけませんね。半分は持ってきて下さらなくちゃア、雑費が払えませんから」

ニコリともしないで重大な訓示を云い渡した。男女三十名の重役連、訓示の重大さに気づいたのは、信二の家を辞してからであった。

「売上げをあんまり使いこんじゃいけませんね、と。たしか、そう云ったねえ。アンマリ、と。アンマリか。ちッとはいいのかい？」

「半分は持ってきて下さらなくちゃアと仰有ったわねえ」

「ウウム。そうか。オイ。これだぜ。これを政治的フクミと云うんだ。今の言葉でな。そうか。血筋は争えないもんだなア。さすがに名門の子孫だよ。おそるべき政治的手腕だぜ。バカどころか、バカとみせて、見上げた腕じゃないか」

「政治家ねえ」

「おそれいった」

にわかに認識が改った。

若干の考察（備忘）

広告が明治期に「造語」されたとすれば、多くの人にとって「その意味は新たに探られ」る時期がそれ以降引き続いたに違いない。また、自らその言葉を書いたり、話したりする場合には「何らかのその後でなければ表せない新たな意味をそこに吹き込もう」と、したに違いない。いわば人工的な造語は、頭書は「意味が空洞」であったところに、「誰か」が「何か」を充填しようとしたのである。少なくともそれは、「広告業界」や「広告メディア」側の者にとっては、ビジネスの新機軸である。

とはいえ、方やの受け手、社会の側がまったくその「造語」と「意味」に埒外であった

訳でもない。維新の新社会、新聞や雑誌を含む明治のイノベーションの中で受け手、社会もまた、この造語に新たな意味を込めることに追随し加担したのであろう。その際、マス・メディアの中の広告が「広告」と呼ばれたことは否定しないが、その外側のかつてから存在した「旗」「高札」や「ビラ」「ポスター」、そして明治期以降のイノベーションと考えられる「楽隊」「電灯」といったものまでもが「広告」という言葉に包含されて行くのである。

さらに「公言」「讃辞」「誇張」といった日常的かつ非特権的（つまり多額の資金を要さない）な社会的言語ともなり、さらに進んで抽象的な「組織」「本能」「PR」といったことまでもがこの造語の指し示す意味となって行ったことをここで確認する。

典拠文献（番号は本文掲出順序の番号に同じ）

1．徳富猪一郎（1886）『将来の日本』経済雑誌社、p.87.
2．大杉栄（1970）『大杉栄選　日本脱出記・獄中記』現代思潮社、p.299.
3．志賀直哉（1915）『新興文藝叢書第七編　或る朝』春陽堂、p.70.
4．伊波普猷（1975）『伊波普猷全集　第九巻』平凡社（『琉球新報』大正二年三月11～20日連載の記述）、p.356.
5．上司小剣（1914）「鱧の皮」『ホトトギス』第17巻第４号（209号、１月号）、p.2.
6．谷崎潤一郎（1916）『鬼の面』須原啓興社、p.126.
7．近松秋江（1916）『蘭燈情話』蜻蛉館書店、p.20.
8．長谷川時雨（1918）「竹本綾之助（美人傳）」『婦人画報』４月号、東京社、p.108.
9．喜田貞吉（1919）「エタに対する圧迫の沿革」『民族と歴史』第二巻第一号（特殊部落研究号）、p.132、日本学術普及会.
10. 和辻哲郎（1963）『和辻哲郎全集　第20巻』岩波書店（大正九年一月『大阪朝日新聞』初出の記載）、p.126.
11. 魯迅（井上紅梅訳）（1932）『魯迅全集』改造社（1922年６月の記述）、p.202.
12. 寺田寅彦（1922）「神田を散歩して」『解放』８月号（原本未確認なれど1960年の全集に記述あり）.
13. 愛知敬一（1923）『ファラデーの傳　電気学の泰斗』岩波書店、p.10.
14. 辻潤（1982）『辻潤全集　第１巻』五月書房（1923年11月、四国Ｙ港にて、の記述）、p.391.
15. 岡本綺堂（1924）『写真報知』10月号（原本未確認なれど、岡本綺堂（1956）『岡本綺堂読物選集Ⅱ　木曾の旅人』東京ライフ社、p.53）.
16. 日本童話研究会（1927）『家なき子』九段書房、p.81.
17. 光文社（2000）『『探偵趣味』傑作選　幻の探偵小説』光文社に橋本五郎（1927）「自殺を買う話」『探偵趣味』５月号の記述（原本未確認）.
18. 宮島資夫「四谷、赤坂（六）」『東京日日新聞』10月４日夕刊.
19. 宮武外骨（1928）『一円本流行の害毒と其裏面談』有限社、p.14.
20. 小酒井不木（1929）「闘争」『新青年』10巻６号（昭和４年、５月号）博文館、p.11.
21. 林不忘（1970）『一人三人全集Ⅱ　時代小説丹下左膳』河出書房新社に『オール読物』1934年５月号の

記述あるも原本未確認.

22. 小熊秀雄（1990）『新版　小熊秀雄全集　第二巻』創樹社、p.55に記述.
23. 蘭郁二郎（1993）『火星の魔術師』国書刊行会、p.129.（『探偵文学』1936年５月号の記述あるも原本未確認）
24. 正宗白鳥（1942）『旅人の心』青磁社、p.21.
25. 織田作之助（1946）「アド・バルーン」『新文学』二、三月号、p.33、全国書房.
26. 太宰治（1947）「小説ヴィヨンの妻」『展望』３月号、p.100、筑摩書房.
27. 牧野富太郎（1947）『續植物記』櫻井書店、p.274.
28. 木村荘八（1949）『東京の風俗』毎日新聞社、p.27.
29. 中井正一（1951）「脱出と回帰」『思想』８月号（No.326）、p.11、岩波書店.
30. 片山廣子（1953）『燈火節』暮しの手帖社、p.156.
31. 坂口安吾（1954）「文化祭」『小説新潮』６月増大号（第八巻第８号）、p.273.

参考文献

長谷川泉編集（1987）『現代日本文学研究　情報と資料　愛蔵版』至文堂
飛田良文編（2012）『国立国語研究所「日本大語誌」構想の記録』港の人
小田切進（1992）『増補改訂　現代日本文芸総覧（上）（中）（下）（補）』明治文献資料刊行会
岡野他家夫（1942）『書物から見た明治期の文藝』東洋堂
――――――（1962）『日本近代名著解題』有明書房
――――――（1967）『日本近代名著と文献』有明書房
大久保典夫・高橋春雄編（1983）『日本文学研究事典』東京堂出版
真鍋元之編（1967）『大衆文学事典』青蛙房
三好行雄・浅井清編（1981）『近代日本文学小辞典』有斐閣
三好行雄・竹盛天雄・吉田熙生・浅井清編（1994）『日本現代文学大事典　作品篇』明治書院
明治・大正・昭和の名著総解説編集部編（1983）『明治・大正・昭和の名著総解説』自由国民社
森岡卓司（2000）「「門」を評す」と谷崎文学の理念的形成――谷崎潤一郎と夏目漱石（一）――」『日本文芸論叢』第13・14合併号、東北大学国文学研究室、pp.58～69
有精堂編集部（1994）『時代別日本文学史事典　近代篇』有精堂出版

―2015.6.30受稿―